

福井 眼鏡 江
金子眼鏡店
ESTABLISHED 1958

函館市東広町17-1 TEL/0138-22-3070
10:29~19:29
不定休 駐車場有(元町パーク2F)
www.kaneko-optical.co.jp



金子眼鏡の公式サイト

特別が日常になる。



特集

共に生きる
外国人との「共生社会」について考える。
ということ。

CLIP

HAKODATE

【クリップ函館】vol.20

CLIP HAKODATE
【クリップ函館】vol.20

伊東克洋
榊原芳美
佐藤香織
櫻坂麻規子
ハウレット・ハヌル
申 東煥
メレンシオ・ヘクター
古地パメラ
中川大介
CLIP GALLERY
牧野 潤

荒木あけみ
櫻坂麻規子
中川大介
夏井俊介
平野陽子
田畑裕証
小宮伸二
川村幾代
新垣加奈
松田夏海
はがなつの
大下智一
シャッツォー・舞雪美
白云子
北見伸子
中村ひでのり
KOTOMI

HI-F INFORMATION
HI-Fからのお知らせ
参加者たちの声
大橋 敏
From H
道南のイベント情報



TAKE FREE



しながき加奈
ウイメンズクリニック
SHINGAKI KANA WOMENS CLINIC

生理の悩み／更年期の相談／不妊症／小児・思春期の婦人科相談／
子宮がん検診／プラセンタ／子宮頸がんワクチンなど

	月	火	水	木	金	土
9:00~12:00 (受付9:00~11:30)	○	-	○	○	○	-
14:00~17:00 (受付14:00~16:30)	○	-	○	○	○	-
10:00~15:00 (受付10:00~14:30)	-	-	-	-	-	○



【休診】火・日・祝日・年末年始
【診療受付時間】月・水・木・金／午前11:30まで、午後16:30まで、
土／14:30まで。
函館市五稜郡町35-12 ブルーミー五稜郡1F
Tel. 0138-83-2551 URL: https://sk-womens.com
ご予約はHPから→



函館の味、
キッコウカワイチの味。

私どもキッコウカワイチ 道南食糧工業は、
昭和十七年の創業以来、
函館唯一の味噌・醤油の製造元として、
ずっと変わらぬ函館のみながか愛される味に
こだわって続けてまいりました。

道南食糧工業(株)
北海道函館市栄町2-7 0138-22-2721

【直売所】
営業時間
8:30~17:00
※土曜日は9~15:00
定休日/
日曜日・祝日・第2・第4土曜日



2026年3月号(隔月刊)
2026年3月1日発行
発行人/海田 謙 編集人/中村ひでのり

CLIP HAKODATE 編集部
〒040-0564 函館市東広町17-1 TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0980

共生社会」ということ。

外国人との「共生社会」について考える。

特集

共に生きる

館でも、介護施設や飲食店、宿泊施設等々、さまざまな場面で、働く外国人の姿を見かけることが当たり前になっている。建設現場や水産加工場で、外国人労働者がいなくてはもはや成り立たない状況だという話もある。現在、市内の在留外国人の数は約2,100人。この数字を見れば「そんなにたくさん外国人がいるのか」と思う人もいられるかも知れないが、全国の自治体の中では決して高い割合ではない(右ページ表参照)。つまり日本国内には今、かなりの数の外国人が生活している。

彼らが日本で暮らすための在留資格は様々だが、近年急速に数を増やしているのが「技能実習」あるいは「特定技能」と呼ばれるもの(「技能実習制度」に関しては様々な問題点が指摘され、2027年4月からは「育成就労制度」へと移行することが決定している)。この「技能実習」や「特定技能」という制度は、深刻な人手不足問題を抱える日本社会の中で、労働力補填として重要な役割を果たしている。そして今後も、外国人労働者は日本の労働力として不可欠であり、特定技能を中心とした受け入れ体制の強化がさらに進む見通しだという話もある。

一方、「外国人が増加していくことへの不安」から、在留管理の強化、審査の厳格化を望む声も強まっており、少子高齢化・労働力不足という現実との間で揺れている。また、「移民を受け入れるかどうか」の前に、すでに受け入れられているに制度が追いついていないという現状もある。欧米の国々の移民問題と日本が今直面している問題は、地理的にも歴史的にも大きな違いはあるが、共通しているのは「人手不足による労働力の必要性」vs「社会的負担・治安・文化摩擦への不安」という点だ。かつては寛容だった北欧の国でも、近年は厳格化の方向に進んでいるという話もあれば、計画的に移民を受け入れ、比較的成功している国もあるという。

外国人の受け入れをこの先どのようにしていくのか、この問題は、日本社会の有り様に関わる問題だ。それは函館のような地方の街にも大きく影響している。今、日本は大きな岐路に立っているといっている。

① 函館市の人口と在留外国人数

総人口	236,515人
在留外国人数	2,103人
在留外国人数の割合	0.889%

●全国自治体ランク(※)

在留外国人数	330/1670位
在留外国人数の割合	1412/1670位
前年度からの変動	1062/1670位

資料参照 / 2025年 住民基本台帳に基づく人口調査 2025年6月在留外国人統計 (※)市町村及び特別区を含む。

② 函館市の在留外国人の国別内訳

ベトナム	501	パキスタン	15
インドネシア	307	モンゴル	15
ミャンマー	234	バングラデシュ	12
中国	212	インド	3
ネパール	163	ブラジル	3
フィリピン	161	その他	141
韓国	154		
スリランカ	49		
台湾	38		
米国	34		
カンボジア	24		
タイ	22		
ロシア	15		

③ 日本国内の主な在留資格

- 【永住者】
 - 【永住者】の許可を得るには、原則として以下の条件を満たす必要がある。居住要件 / 原則として継続して10年以上日本に在留し、そのうち5年以上は就労資格や居住資格(配偶者ビザ等)をもって在留していること。
 - 兼行要件 / 法律を遵守し、日常生活においても社会的に非難されることのない生活を営んでいること(交通違反や犯罪歴がないこと)。
 - 年収維持要件 / 将来にわたって安定した生活が見込まれる資産や技能、または安定した年収(目安として300万円~400万円以上)があること。
 - 公的義務の履行 / 税金、年金、健康保険などの公的義務を適正に履行していること。
- 【特別永住者】
 - 【特別永住者】とは、戦前から日本に居住し、戦後に日本国籍を離脱した韓国・朝鮮人、台湾人とその子孫に与えられた特別な身分系在留資格で、入管特例法(日本との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者の出入国管理に関する特例法)に基づき、就労や居住の制限がなく、在留期間に制限がない点で「永住者」と似ているが、法的根拠と対象者が異なる。申請は居住地の市区町村窓口で行い、法務大臣の許可が必要。
- 【定住者】
 - 【定住者】は特別な理由(日本人、日本人との離婚・死別後の扶養、難民など)を考慮し、一定期間の居住を許可する身分系在留資格で、原則として就労制限がなく、活動範囲が広いのが特徴。在留期間は1年、3年、1年、6ヶ月など個別に指定され更新が必要で、永住者と異なり在留期限がある点に注意が必要。

就労目的の在留資格

外国人労働者が日本で働くには、その活動に応じた在留資格を取得する必要がある。例えば、エンジニアとして活動するのであれば、【技術・人文知識・国際業務】、公認会計士として活動するのであれば【法律・会計業務】、企業の経営者として活動するのであれば【経営・管理】といった形になる。これらの在留資格のことを「就労系在留資格」と呼ぶ。

【技能実習】

開発途上国等の外国人を日本に受け入れ、実務(OJT)を通じて技術や知識を習得してもらい、母国の経済発展を担う「人づくり」に貢献する国際貢献制度として1993年に創設されたのが技能実習制度。2009年に入国管理に関する特例法が改正され、2010年7月1日から新しい技能実習制度が施行され、生産活動を伴う実習が一本化された。また、2017年11月1日、「技能実習法」が施行され、技能実習機構(OITP)が設立、監理団体・実習実施者の許可・届出制導入、技能実習計画の認定制度化などで保護と適正化が強化された。最長5年間(実習1~3号)の滞在が可能で、雇用関係の下で労働関係法が適用される。ただし、「技能実習制度」は問題点が指摘され、2027年までに廃止し、新たな「育成就労制度」への移行が決定している。

【特定技能】

2019年4月に創設された、人手不足の深刻な16の産業分野(介護、建設、外食など)で即戦力となる外国人が働くための在留資格。1号(最長5年)と、より熟練した2号(無期限)があり、深刻な人手不足12分野で即戦力として働く資格で、近年急速に増加している。

学業・家族・その他

【留学】

日本の学校で教育を受けるためのものであり、働くことは認められていない。ただし、地方出入国在留管理局等で、手続きを行い、「資格外活動許可」を受けるとによって、アルバイトをすることが可能。

【家族滞在】

技術・人文知識・国際業務や留学などのビザで日本に中长期滞在する外国人の、扶養を受ける配偶者または子が日本で生活するためのビザ。原則として就労は不可だが、「資格外活動許可」取得で週28時間以内のアルバイトが可能。

技能実習制度から育成就労制度へ。

開発途上国への技術移転を目的とした国際貢献という立場で創設された「技能実習制度」だが、2027年4月1日から「育成就労制度」へ移行し、現在の制度は廃止されることが決まっている。現状と今後の主なポイントは以下の通り。

1. 現行制度の概要(技能実習)
 - 目的 / 日本で習得した技能を母国の発展に活かす「国際貢献」。
 - 期間 / 最長5年間(1号:1年、2号:2年、3号:2年)。
 - 課題 / 転籍(転職)が原則不可であることから、不当な低賃金や人権侵害、失職といった問題が深刻化していた。
2. 新制度への移行(育成就労)
 - 開始時期 / 2027年4月から。
 - 目的の変更 / これまでの「国際貢献」に加え、深刻な人手不足に対応するための「人材確保・育成」が明確に掲げられる。
3. 主な変更点
 - 転籍の緩和 / 一定の条件(同一企業で1~2年就労、日本語能力など)を満たせば、同じ分野内での転職が可能になる。
 - 特定技能への連携 / 「育成就労(原則3年)」を経て、より長期就労可能な「特定技能」へスムーズに移行できる設計となる。
4. 今後の流れ
 - 2027年の施行までは現行の技能実習制度が継続されるが、施行後3年間は経過措置として旧制と新制度が併存する期間が設けられる。

③ 函館市の在留外国人の在留資格別内訳

技能実習2号口	500	教育	12
特定技能1号	347	教授	11
留学	260	介護	10
永住者	232	経営・管理	9
技能実習1号口	210	永住者の配偶者等	6
技術・人文知識・国際業務	108	宗教	4
特別永住者	105	文化活動	3
日本人の配偶者等	86	技能実習1号イ	3
家族滞在	76	高度専門職1号イ	2
特定活動	45	特定技能2号	2
技能	30	技能実習2号イ	2
技能実習3号口	26	医療	1
定住者	13		

C O L U M N

海外の「移民問題」について駆け足で。

【アメリカの場合】

米国の移民数は5,330万人に達しているものの、伸びは鈍化している。しかし、非正規移民(不法滞在者)は依然として大きな課題で、約1,100万人前後と推計されている。移民は労働力として経済に貢献している一方、政治の分断の大きな要因ともなっている。現在、トランプ政権(第2期)下で移民政策の厳格化が進行中で、労働ビザ(H-1B)や永住権(グリーンカード)の制限・縮小が続き、法的移民の受け入れが抑制されている。また、雇用のビザ制度も見直されている状況だ。

国内では強制捜査や移民拘束が激化し、議論が呼んでいる。一部州・地域での大規模な移民捜査や ICE(移民・検閲捜査局)作戦が拡大、逮捕・拘束が増加、政府の強制送還強化につながっている。また、移民当局の捜査中に民間人が死亡する事件や不当逮捕が発生し、それをめぐる世論・政治的反発が強まっており、移民取り締まりへの反対デモ・運動が各地で拡大。ミネソタやカリフォルニア、ニューヨークなどで、「Abolish ICE(ICE廃止)」などを掲げる抗議活動が継続している。移民政策は今、米国内で政治的分断を招く、極めて重大なテーマになっている。

【EUの場合】

EU内への移民・難民の流入はピーク時より減少傾向にはある。しかし、依然として多くの申請や不法滞在が発生している。2023年の数字を見ると4,300万の合法的移民が入国(就労・留学など)しており、EU全体の人口構造・労働市場への影響が進んでいる。EU全体の人口に占める非EU国籍者は約6.4%。増加傾向は2019年から続いている。また、EU内で不法滞在している非EU国籍者は約92万人(New Pactより、多くがドイツ・フランス・イタリアなどで確認されている)。

EU内で長年調整されてきた「新たな亡命・移民パクト(New Pact on Migration and Asylum)」は、今年の夏から施行予定だ。これにより、受け入れ手続きや庇護審査の統一化、負担の共有・加盟国間の連帯メカニズム、審査期間の短縮や境界管理の強化などが進むことが期待されている。

多くのEUの国々では、反移民・環境管理強化を掲げる政党が勢力を伸ばす動きが見られ、極右勢力や国民主義政党が移民問題を争点化しており、政策決定への影響力が高まっている。移民をポジティブに見る層、経済成長への貢献を重視する層と、治安・社会サービスへの負担を懸念する層との間で意見が分断しており、欧州の政治対立軸(親EU vs 反EU)の一部となっている。

【ドイツ】

傘下保護(subsidiary protection)資格を持つ人への、家族呼び寄せを2年間停止。市民権取得の最短期間も延長される措置が進行中。また、不正入国者や適正な書類を持たない場合、入国時に拒否や返り送り処置を強化(恒常的ではなく段階的な実施)。

【フランス】

フランスは、EUの中では従来から比較的積極的に労働移民・難民を受け入れてきた国だ。しかし、出生率低下や人口構造の変化の中で、移民政策の見直し議論が社会的に広がっている。移民受け入れを推進しつつ、社会統合や福祉制度との調整が重要な課題となっている。

【イタリア】

新しい移民・庇護法のもと、不法に到着から90日以上後に申請した場合の受け入れ制限、海路で救助された人への優先支援制度、家族再統合のための居住期間条件の強化などを導入。また、労働ビザを拡大し、2026~28年に約50万人の非EU労働ビザ発給計画を進め、労働市場の労働力不足の解消も図っている。

【スウェーデン】

審査中の庇護申請者を指定収容施設で待機義務化(違反があれば受け入れ拒否に繋がる可能性)。

【スペイン】

約50万人の不法滞在者に、1年の居住・労働許可を与える計画を発表。これが賛否両論の議論になっている。



持続可能な「共生社会」のために 必要なこと。

近年、「外国人との共生」が社会的に大きな課題となっている。私の属する日本語教育の領域でも文部科学省と協力しながら、よりよい共生社会を目指すための指針の作成、実践を行っている。私も実際に担当者としていくつかの事業に参加しているが、こういった国や各自治体が推進する事業・政策は政治的なイデオロギーを色濃く受けている。それ自体はある意味避けられないことであるが、問題のひとつは政策の一貫性が担保されていないことだ。

これは他の社会的課題に関しても同様だが、例えば、組織のトップが変わればそれまでの方針が一変してしまう。これでは対策に必要な経験値や実践知の蓄積が難しい。また、政治的なイデオロギーはメディアの報道姿勢やSNSによる拡散によって形を変えつつ、気づかないうちに我々市民の認識、考え方に大きな影響を与えてしまう。これはいわゆるプロパガンダであり非常に危険なものだ。現代社会では氾濫する情報の流入を防ぐことは難しい。だからこそ、我々市民一人ひとりが、与えられた情報をそのまま受け取るのではなく、自ら考え判断する姿勢を持つことが重要だ。特に「外国人との共生」という課題は、政府や自治体だけに任せるものではなく、地域社会や日常生活の中で私たち自身が直接向き合う問題でもあるからだ。大切なのは一人ひとりが当事者意識を持ち、身近な場から能動的に行動していくことだ。地域の国際交流イベントについて調べてみるだけでもいい。ちょっとした挨拶だけでもいい。本当に小さなことでいい。主体性を持った行動は経験値として蓄積され、次のステップへの原動力となるだろう。



PROFILE

静岡出身。パデュ大学言語文化学科 博士後期課程修了。応用言語学博士。HIF「日本語文化講座夏期セミナー」プログラムのコーディネーター。著書に「デジタルネイティブのコミュニケーション」(初級日本語とびら)「初級日本語とびら」(アスク出版)等がある。

寄稿

まず互いを知ろうとする。 そこから始まる「共生」。

ある留学生の話しよう。函館に留学中の中休み、彼は札幌を一人旅行している。ある晩、ふらりと居酒屋に入り、カウンターに座ると隣で飲んでいたおじさんに話しかけられる。「どこから来たの?」「台湾です」「へえ、台湾」。少しすると、目の前に耐ハイが出てくる。「隣のお客様から」。彼が驚いて隣のおじさんを見ると「震災の時、台湾には助けてもらったから」。—これは私がHIFで教えていた学生に教えてもらったエピソードである。今回「共生」というテーマについて考えた時に最初に思い出した話でもある。

私が米国大学で日本語を教え始めてから20数年が経つ。その間、大統領はのべ5人。リーマンショックもコロナも乗り越えた社会をずっと大学の教室から見えてきた。日本語の教室は社会の縮図でもある。日韓共催のワールドカップや冬ソナブームに沸いた2000年代、アメリカの日本語のクラスにも金さん、朴さんが溢れた。現在はアメリカ人の学生がK-POPの推しについて日本語で発表する時代だ。今は「これが日本の文化です」と教えることがめっきり少なくなった。日本の文化、特に漫画やアニメ、ゲームなどのポップカルチャーは学生の芳がずっとよく知っているからだ。日本語教師として「オタク」には教えるな、語らせろ」というルールに従っている。私がアメリカ(または日本以外の国)で教える日本語教師として共生を語ることができるようになる。ヒントはこのオタクと推しにある。そのオタクと推しの世界には国境も人種も存在しないからだ。

私が子供の頃、韓国はまだ近くて遠い国だった。私が高校生の頃、皆がアメリカはハリウッド映画のようにキラキラ



PROFILE

愛知県出身。関西外国語大学卒業。コロニア大学大学院修士課程修了(日本語学)。HIF「日本語文化講座夏期セミナー」プログラムのコーディネーター。著書に「初級日本語とびら」(アスク出版)等がある。

寄稿

「外国人との共生」を考えるとときには日本の社会文化構造も考える必要がある。よく日本は「ムラ社会」であると言われる。農耕を主としてきた日本では地域の共同体における和・秩序がもっとも重視され、「郷に入っては郷に従え」という考え方が広く根付いている。もちろんこういった考え方が日本人の外見のなれ備正しさにつながっているという強みもできるが、この集団意識もたまたま弊害も大きい。強すぎる集団意識は相互監視を促し、同調圧力を強める。同調圧力は日本におけるさまざまな社会の問題と深く結びついている。いじめ問題や過労問題、コロナ禍での「マスク・自衛警察」などはその最たる例だろう。「外国人との共生」の観点から言えば、こういった考え方は結果的に同化政策やナショナリズム、排外主義につながる非常にやっかいな概念になる。さらに言えば、日本社会に内在する対人関係の枠組みや言語文化的特徴が、排除の構造を無意識のうちに強化している可能性もある。その代表的な例として、日本の言語文化概念として存在する「ウチ(内)・ソト(外)・ヨソ(他所)」という境界意識が挙げられる。ウチとは家族や親しい友人など、親密性の高いグループ、ソトは会社の同僚や取引先など、社会的な状況に応じて関係を持つグループ、ヨソは恒常的に一定の距離を保つ他者を指す概念である。この枠組みは本来、関係性や状況に応じて流動的に変化するはずである。ところが、外国人は「外国入」という属性のみで「ヨソ」として固定化されやすい。そのような状態では対等な社会構成員としての関係は築きにくいはずだ。共生社会を実現するためには、この固定化された境界意識そのものを問い直し、自身の「ウチ・ソト」に含める範囲を柔軟に再定義していく視点が必要である。

「外国人との共生」における難しさを政治的イデオロギーの問題としてだけ捉えるのではなく、社会文化構造や言語文化概念が日常的に再生産する「境界」のあり方も目を向ける必要がある。一時的なポピュリズムや感情的な言説に流されず、柔軟な姿勢を持ち、能動的に行動することこそが、持続可能な共生社会を築くための第一歩となるだろう。

ご意見をお寄せいただきましました。

外国人との「共生」について、

「函館の現場から見えること」 外国人との共生を支える「言語」と専門性。

外国人との共生が社会的な課題として広く語られるようになった現在、その基盤として改めて注目されているのが日本語である。地域や職場、学校現場で生じる摩擦や軋轢の多くは、価値観や文化の違いそのものよりも、言葉が十分に共有されていないことに起因している場合が少なくない。

言葉が十分に通じないまま生活や就労を始めることは、外国人にとって大きな負担であると同時に、受け入れる側にとっても誤解や不安を生む要因となる。互いに「伝えたい」「分かってほしい」という前提がずれたとき、小さな行き違いが大きな不信感へと発展してしまうのである。

こうした状況を背景に、日本語教育を取り巻く制度は近年大きく動いている。日本語教師の国家資格化が進められ、日本語教育の専門性を明確に位置づけた上で、専門家が継続的に外国人支援に関わる体制づくりが進行している。政府は、外国人との共生を実現するためには、日本語教育の専門家が現場に関与することが不可欠であるとの立場を明確にしている。

このような流れの中で、日本語教師に関心を持ち、将来の分野に関わりたくいとする学生は着実に増えている。単なる語学指導ではなく、生活、進学、就労といった外国人の人生の節目を言語の面から支えたい、社会と人をつなぐ役割を担いたいと考え、若者が育っていることは、今後の共生社会にとって大きな意味を持つ。

一方で、外国人が日本語を学びたいと考えたとき、地方ではその機会が現実的に限られているという課題がある。日



PROFILE

北海道教育大学函館校 教授。秋田県出身。筑波大学第二言語日語学・日本語文化学専攻卒業。筑波大学大学院文・言語学専攻修士課程修了。著書に「国際地域研究Ⅷ」(共著、大学教育出版)他。

寄稿

ホームステイを通して 見えてくる「共生」のカタチ。

職 業病かもしれないが、「外国人との共生」と聞いてすぐに思い浮かぶのはホームステイだ。留学生を受け入れるホームステイは、「外国人との共生」を家庭という単位で実践している。異なるバックグラウンドの人を受け入れ、生活を共にするという性質上、100%成功するを保証はできなく、うまくいかないというリスクをはらんではいけ、その経験自体に価値がある。そしてそれは、家庭を越えた地域レベルでの共生社会の実現に繋がるものであると信じている。「ガイジンを家に泊めて、何か盗まれたりしないの?」「異人さんと和食いんどうだろうか?」—これらは、留学生の受け入れにあたり実際に寄せられる質問だ。相手日本人ではないということ、やはり少し生構えしてしまうのだろう。その根拠にあるのは「知らないものはいくつもある」という潜在意識なのではないかと思う。

明日からいきなりホストファミリーになる必要はない。まずは自分と違う国や文化に興味を持ち、知ろうとする努力をする。それが共生への第一歩となり得るだろう。そして「知らないものはこわい」という考えが相手に当たってはまると思定すると、自分の国や文化について説明するという行為は、相手の恐怖心を和らげる役割を果たすかもしれない。日本代表を取って語る必要はない。「日本では…」の代わりに「我が家では…」「私は…」と始めてもいい。

明日からいきなりホストファミリーになる必要はない。まずは自分と違う国や文化に興味を持ち、知ろうとする努力をする。それが共生への第一歩となり得るだろう。そして「知らないものはこわい」という考えが相手に当たってはまると思定すると、自分の国や文化について説明するという行為は、相手の恐怖心を和らげる役割を果たすかもしれない。日本代表を取って語る必要はない。「日本では…」の代わりに「我が家では…」「私は…」と始めてもいい。



PROFILE

本誌コラム連載中。12ページ参照。

寄稿

特集

共に生きる
ということ。

北 斗でハウレット農園を営むハウレット・ハヌルさんは、日本生まれ・日本育ちだが、カナダ人の父と韓国人の母の間に生まれ、カナダの国籍を持つ(※)。「外国人だという理由で特別苦勞なことはない」とハヌルさんは話す。小学生の頃、同級生から差別的な言葉を浴びせられた経験もあるが、「子どもが自覚なく言ってしまうのは仕方がない」と考えているという。だが、少年時代は「どうして日本人に生まれなかったんだろう」という葛藤があったそうだ。一方、高校卒業後、カナダの大学へ進学した際には「日本から来た日本人」として見られていたと感じた。ミドルネームの「Justin」が「Justice(正義)」に聞こえるため、友人から「マサオ」というユニークなニックネームを付けられた。

帰国後の面接で日本出身だと話すと、「真面目に仕事をなさるだろう」と評価されたこともあり、日本のイメージを肌身で感じたという。帰国後、両親が開園していたハウレット農園を継いだハヌルさん。だが、経営は決して順調とはいえない道のりだった。公私ともに支えなくなったのが日本人パートナーの存在だ。彼女はエンカルブランドを運営しており、経験と感性を生かして、新しい商品を提案したり、農園のストーリーを伝える広報役を担っていた。「彼女が『ものけぼり』を始めたことがきっかけで、私は『共生』というテーマで、サンは森で、アシタカはタラパで暮らすんです。僕たちは結婚という形はとっていませんし、喧嘩もします。お互い、少し変わり者なんです。だけど相手へのリスペクトは、持ち続けています。これも1つの『共に生きていく』形なのかもしれません」。



PROFILE 自然栽培ベジータブルハウレット農園店主。エンカルブランド(Encarlo)を運営するパートナーとともに、ライフスタイルブランドJUSTIN and ROMIも展開中。

(※) 国籍には、血統主義と出生地主義の2種類の考え方があり、日本は血統主義のため、親の国籍を引き継ぐ形となる。

外国人の方に訊いた「共生」

アメリカの大学を卒業後、青森県で外国語指導助手(ALT)として働いているメレシオ・ヘクターさん。日本での暮らしで困っていることはないか尋ねると、「わからないことがたくさんあります」との返答があった。「小さなことだが、パスの調べ方やコピー機の使用の方法が。他に、私はJETプログラム(※)で日本に来たので、銀行口座の開設や家の準備をしてももらえたり、もし自分で行うとなったら難しかったです。役所の書類は、今も理解するのがないんです。日本語で日常会話ができたとしても、金融機関や不動産、行政関係の手続きには、専門用語や日本独自の制度への理解など、大きな壁が存在している。一部手続きだけでも多言語対応してくれると、精神的な負担は減るだろうと語る。また、ヘクターさんは、日本人の友人を作ることが難しく、望んでいる。だが、日本の大学に留学する場合と違い、なかなかきっかけを掴めないのが現状だ。「本当は地域のイベントにも参加したいんです。だけど、私が参加することで迷惑がかかるんじゃないかと懸念しています。日本では空気を読むことが大切です。私も気をつけているけれど、上手くできていないこともあると思うから」。



PROFILE アメリカ・ニュージャーシー州出身。子どもが、ボク(ジェームズ)のアニメを見て、日本に興味を持つ。英語でのホームステイ経験あり。2024年8月より現職。

「先日、職場の忘年会がありました。仕事中はみなさん忙しそうだけど、その時はたくさん話げできました。みなさんは私を真面目な性格だと思っていたようですが、そんなことはありません。話をするとって大切ですね」。

(※) 語学指導者を行う外国若年招致事業(The Japan Exchange and Teaching Programme)の略。外国若年を招致して地方自治体等で任用し、外国語教育の充実と地域の国際化推進を図る事業。

「来 日当時、日本は明るく、文化的にも豊かに見えました。日本と韓国の最低賃金が約3倍の開きがあったとします。正直、日本人は韓国にあまり興味がなかったように見えました。そう語るのは、1996年来日し、函館と韓国の架け橋として約30年に渡り活躍してきた申東煥(シン・ドフワン)さんだ。現在、韓国の最低賃金は1万320ウォン(円換算で約1,135円)(※)。経済成長を遂げ、精神的に余裕を持てる人も増え、エンターテインメント産業も大きく発展した。日本でも韓国ドラマや音楽、化粧品、食品などが人気を博し、申さんの元にも「ショッピングがしたい」「ドラマの聖地巡礼がしたい」などの相談が寄せられているという。文化的な交流は進んでいる一方、日本と韓国には政治的課題も残る。この30年を振り返ると、日韓関係には緊張が走ったこともあった。また、最近の日本では、外国人全体に関する議論や報道で、批判的な意見も目立つようになってきた。申さんは今の社会をどう見ているのだろうか。

「韓国では、政府が国民の反日感情を刺激して、政治利用した局面もありました。ですが、今は多くの韓国人が日本を訪れたり、日本人の友人がいたりするので、単純な対立構構は通用しません。主体的に考える人が増えれば、より良い社会になると私は信じています」。ドラマでも、音楽でも、化粧品でも、きっかけはなんでも良い。まずは興味を持ち、相手を知らろうとする姿勢が大切だと申さんは語る。



PROFILE 韓城市出身。東京での日本語学習の後、ホームステイをきっかけに訪れた函館を気に入り、移住。韓国語講師、旅行業、放課業など、多方面で韓国と函館の文化交流に貢献。

(※) 日本貿易振興機構JETRO(ジェトロ) https://www.jetro.go.jp/business/2025/08/0330611948370833.html

「私自身は、韓国人だからという理由で、函館で嫌な思いをしたことはありません。私という人間を理解してもらい、信頼を得られて、楽しい毎日ですよ」。

私 が教えている函館の日本語学校にバングラデシュ出身の男子学生がいます。サティ君は26歳、ソバ君は31歳。2人とも母国の大学で会計学や文学を学んでいましたが、日本での留学ビザを得たので退学して2024年来日しました。2人とも勤働で礼儀正しく、誠実な人物です。なぜ来日をしたのかと聞くと、「日本は安全だし、勉強のシステムがいい。給料がいい」と口をそろえます。母国では人畜にかかわる事件も多く、治安のいい日本は安心だと言います。「勉強のシステム」とは日本語学習のテキストがそろい、テストや成果発表の場も多く語学を高められる、という意味です。1億7300万人と日本の1.4倍の人口が「密」な状態で生活するバングラデシュ。繊維産業や農業が盛んですが、若い世代が学業で努力してもコネや企業経営者などへのリベートがないという仕事を得るチャンスは少ない、と彼らは言います。平均的な月給が円換算で1万円程度と低いこともあり、海外での出稼ぎはごく普通のこと。

渡航先は中東や東南アジアが多かったが、最近では日本が1、2番目です。でも日本は物価が高い。彼らも来日時、学費や渡航仲介業者への手数料など約120万円かかったそうです。渡航資金の工面は大変じゃないかと聞くと、「そうだけど、いい就職ができればいい」。2人とも4月関東の専門学校でビジネスやIT(情報技術)を学ぶ予定です。専門学校は学費も年間約70万円と安くはありません。東京近郊だと生活費も高い。それでも、「日本で働きたい」という彼らの意欲は極めて高いです。

●永住型で受け入れ 留学生たちは1~2年間、日本語を学んだのち自動車整備、ITビジネスなどの専門学校や大学へ進むか、飲食、ホテル、介護などの分野で就職します。進学組は「技術・人文知識・国際業務」、通称「技入国」と呼ばれる「ハイスキル」の就労可能な在留資格の取得を目指すケースが多い。一方で就職組は「ミドルスキル」の「特定技能」という在留資格を目指します。「ロースキル」と呼ばれる「技能実習」より上のスキルレベルでの就労を目指すこうした学生が、アジア各国などから私の勤務先の日本語学校に毎年50人近く入ってきます。多くは20代の若者です。

私を知るだけで函館には日本語学校が3校あり、150人を超す留学生が在籍しています。「就労目的で来日する怪しからん留学生が多い」との批判があるようですが、見る限りそのような生徒は見当たりません。むしろ高い生活費や学費を承知で来日し、アルバイトで生活費を稼ぎつつ日本で「よい仕事」を見つけたいと願う学生が多いです。各業界での深刻な人手不足を考えれば、さまざまなスキルレベルで働く外国人の増加は必至でしょう。2025年10月時点で外国人労働者は国内の全労働者の4%弱を占め、前年から1割増。道内では17%も増えています(2026年1月31日北海道新聞)。国立社会保障・人口問題研究所は2070年に外国人が日本の人口の10%を占めると予測していますが、それは、そのような人材の就労や定住を可能にする制度がつくられてきた結果です。

在留資格の「技入国」は在留期間があるものの更新回数に制限はなく、定住の道が開かれています。「特定技能2号」も更新の上限がありません。日本政府は「移民政策を取らない」と言いつつ、人手不足に苦しむ産業界の要請に応じて制度を整えてきたのです。移民政策に詳しい同研究所の星川トシ・国際関係部部長は近著「ニッポンの移民-増え続ける外国人とどう向き合うか」(ちくま新書、筑摩書房、2025年)で、日本が先進国の中で永住型移民の受け入れ規模で7位に位置する「移民受け入れ国」であり、日本は「労働移民を永住型で多く受け入れる傾向」と述べています。労働移民は社会・経済の維持に一定の役割を果たしており、外国人との「共生」はすでに不可避であるように見えます。



「(上)日本語学校で教壇に立つ申東煥さん。 (下)日本語学校で学ぶバングラデシュ出身の男子学生サティ君とソバ君。22年春から25年春まで、日本語学校の英語科で約25年を過ごした申東煥さん。2025年10月時点で、函館には日本語学校が3校あり、150人を超す留学生が在籍している。

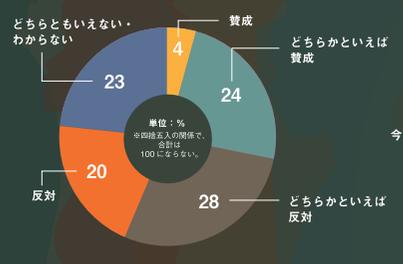
●コンセンサスの不在 こうした現実を、私たちは直視しているでしょうか。2026年1月3日の北海道新聞の記事によれば、前月実施した道民意識調査で人口減少対策として外国人定住者を受け入れることに「反対」「どちらかといえば反対」が約半数を占め、「賛成」「どちらかといえば賛成」を大きく上回りました(=グラフ1)。反対の理由は「日本人との文化や習慣の違いによるトラブルが生じる可能性がある」「治安が悪化する可能性がある」がメインでした。一方、同月12日の同紙記事では対照的な結果が出ています。北海道商工会議所連合会と同紙が共同で行った全道42商工会議所の会頭へのアンケートによると、地域で暮らす外国人は今後増えるべきだとする回答が全体の割に上りました(=グラフ2)。「減るべきだ」はゼロでした。人手不足に直面している雇用者側の認識はこうなのです。このギャップはなぜ生まれたか。政府が労働移民の受け入れを拡大しながら「移民政策は取らない」と言って外国人受け入れの総合的な政策を講じなかった結果、日本社会において労働移民についてのコンセンサスが形成されず、日本人社会と在住外国人の間に断絶が生じているように思えます。外国人と接する機会が少ないまま、「知らぬ間に」外国人が増えて不安」と感じる日本人住民が多いのではないのでしょうか。

●ともに考える 星川氏は前掲書で、旧植民地から人権的な配慮で多く受け入れた移民との間で軋轢が生じている欧米とは異なり、日本のように「人口減少の理由による人材不足が深刻な状況下では日本ととの職の奪い合い、失業による貧困、社会保障への圧迫といった問題は構造的に起こりにくい」と述べています。そして、「アジアの堅調な経済成長とそこにおける新中間層の若者の移住先として日本が位置付けられ」てい説明しています。冒頭で紹介したバングラ出身の2人の言葉からも、それがうかがえます。治安のよさ、教育システムの完成度の高さ、そして就職に際してコネやリベートが過剰に利を働かせていないこと。さらに他の学生たちにも聞くところ、アニメ、漫画など日本のサブカルチャーが彼らを強く引き付けていることがわかります。

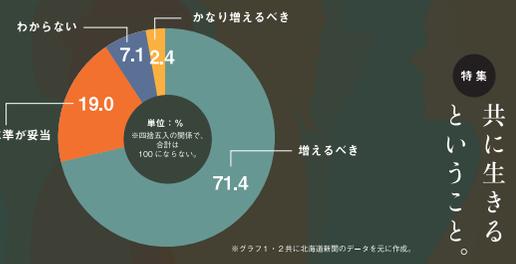
彼ら留学生は当然ながら国民健康保険料を支払っており、少子高齢化で財政のひっ迫する日本の国保制度の一端を支える存在です。人口減少で社会制度や経済の担い手が減る中で、外国人労働者を危険視して排除するのはなく、共生への道を探りながら社会・経済を担う一員となってもらうのが現実的な対応ではないのでしょうか。政府が今年1月にまとめた外国人への総合対応策には、永住者の審査の厳格化など「管理」の色彩が濃い政策が多く含まれ、違和感を覚えます。日本語や日本の文化・習慣の学習の支援も強化するようですが、「覚えさせる」という姿勢ではなく、移民の語学・文化・習慣をも尊重して望ましい暮らし方、社会を豊かにする道を「ともに考える」ことが大切です。

まず必要なのは日本人と外国人が接する機会を多く持つことです。外国と交流しながら発展した歴史をもつ函館には、日本語学校のほかに国際交流や日本語教育の研究に取り組みも団体があり、そうした機会を拡充する策地があります。人口減の著しい地方こそ排外主義に傾かず、真剣に共生の道を深るべきだと思います。

グラフ1 / 道民意識調査 【人口減少対策で外国人定住者の受け入れに賛成か】



グラフ2 / 全道商工会議所会頭アンケート 【地域に移住する外国人数、今後はどのようになるべきか】



特集 共に生きるということ。

外国人との「共生」について どう思うか？

●「察しる」みたいな日本の文化は、美德ではないのかも最近思いました。先日、夫(日本人)と話し合いとなり、「私はあなたのこういう言動にずっと傷ついている」と伝えたら、かなりビックリしました。10年以上連れ添った夫婦ですら、はっきり言葉にしないと伝わらない。寂しかったけれど私も反省しました。文化も風習も違う方々なら、なおさらではないでしょうか。共存を目指すなら、「言葉にしないと伝わらない」と肝に銘じる必要があると思います。(40代・女性)

●「外国人」と呼ばれない、自分を「外国人」と形容しない状態が真の共生社会だと思う。友人に「ごめん、外国人だからわからない」と言われると、こちらも距離感を感じてしまう。私はあなたを外国人ではなく一個人として見るから、「外国人だから」と言わないでほしい。(40代・女性)

●最近の地方では「外国人＝農業・漁業の人、介護施設の人」と狭い範囲で認識していることも多いように見える。(50代・女性)

●ニュージーランドに留学経験がある。皆それぞれにルーツを持っていて、それ

を大切にしていた。ただ、これは英語圏という大枠があるし、複雑に歴史も絡むので…。日本語を日常的に使える国が日本だから、種の意識が強いのかも。(50代・女性)

●外国人労働者に対して「たいへんな仕事、きつい仕事だから、いてくれて助かる」と言うのは良いけれど、それを見ている日本の子どもたちが「たいへんな仕事は外国人に任せれば良い」という間違っただ認識を育てないか心配。(60代・女性)

●数少ない外国人トラブルに注目しすぎ。(30代・男性)

●セルフフレジ、タブレット注文、ネット通販など、日本にいなが街で日本語を話す機会がない留学生が増えているようです。確かに便利になるほどに、人間同士コミュニケーションをとる必要性は薄れていくなと思いました。(40代・女性)

●「〇〇な外国人なら来てもいい(日本文化に溶け込むなら、働いて納税するなら)」みたいな意見を見ると、昔から周囲に馴染めず、定職にも就けず、子どももない私は「日本人だけ社会にメリットのない人間だよな…」って肩身の狭さを感じる。(30代・女性)

●日本の「共生」はどこを目指しているのか。その国や地域によって「共生」の定義が違うはず。日本なりの「共生」の定義を議論して、どんな社会にするのかのゴールを設定すべき時期だと思う。(40代・女性)

●「共生」というのが偽善的な響き。外国人の受け入れにはメリット・デメリットが当然あって「どうせならメリットが大きい社会にしよう」みたいな方が良いのでは。(40代・男性)

●国や行政は「共生社会」という言葉を使いたがるが、現実は全然追いついてな

い。宗教や文化的違いによる問題にどう対処していくのか。地方だからハラル料理を探すのに困るのかと思ってたら、東京でも同じ。ビジネスチャンスでもあると思うけど、そこに入っていきたい企業へのサポートがない。※ハラル認証をとるの日本では非常に複雑な過程が必要。(40代・女性)

●子どもが小さいときに、世界が多様であることを自然に教えていくのが良いと思う。家庭ではムスリム、学校ではキリスト教の友達がいて、街では複数の言語で話そうような環境だと、自然と免疫がついていくみたい(日本の環境では難しいか)。(40代・女性)

●外国人の受け入れについて考えるとき、「日本」という単位は大きすぎると思う。地域によって、産業が違い、必要としている人材も違う。その土地によってちょうどいい(共生の?)バランスがあるのでは？(40代・男性)

●「外国人がどこどこで、なにになににしていた(けしからん!)」みたいな話はいらない。日本人だって迷惑な奴は大勢いる。課題があるなら、どう制度設計し直すか考えた方が健全。共生は「みんな仲良く」じゃなく、「お互いwin-win」ってこと。(50代・男性)

●「ちがいを ちからに 変える街。」っていう渋谷区のキャッチコピーが好きです。「多様であること」が歓迎される社会の方が生きやすくて良いと思う。どんどん外国の人や文化が日本に入ってきて、日本が変わってくれるといいなと密かに思ってます。(20代・女性)

●ヘイトスピーチは論外。たけど、法整備は必要な部分もあると思うから、イコール「排外主義」ってわけじゃない。(20代・男性)

●最近の外国人を巡る言説。「それって事実か？」って思うことがよくある。冷静に見極めるべき。(30代・女性)

「共生」について、匿名を条件に、日本人と外国人、それぞれの意見を集めました。

日本での生活で大変なこと、 「偏見だ」と感じた出来事、 外国人に関する気になる ニュースは？

共生社会の実現のためには、 何が必要だと思う？

●私が日本語で話しても、英語で返事した日本人が少なくなかったです。そして、時々バスで、子供に見られました。(アメリカ/20代・女性)

●仕事が見つかりません。面接時いつも「ダメになった」言われます。いろいろな場所に面接に行きました。たとえば、スーパーの中の野菜とか、肉、パン売場とか面接ときに何回だめになりました。普通の仕事でも外国人を雇用してほしい。(ウズベキスタン/20代)

●日本人はあまりはっきり言わないので、私もどこまで言えば良いかよく分かりませんでした。日本人は規律や秩序を大切にする一方で、多くの外国人を受け入れてきましたが、その中には日本のルールやマナーに十分に慣れていない人もい

ます。互いの理解を深めるために、積極的にコミュニケーションを取り、十分に話し合うことが大切だと思います。(タイ/60代・女性)

●外国人の出入国管理政策、在留資格の取得のニュースが気になります。日本語や日本社会のルールについて学ぶ機会の整備、永住や帰化要件の再検討が必要だと思います。(中国/30代・女性)

●日本人の日常的なマナーを理解するのはたいへんでした。(マレーシア/30代男性)

●日本語がまだまだです。日本語がいいと聞くと嬉しくなります。でも、アメリカでもこの偏見の問題があります。私の高校の友達もアメリカに何年間も住んできましたが、たまに移民として「英語うまい」に言われてしまいました。(アメリカ/10代・女性)

●多分いちばん簡単に言うことは、「他人を理解できない時、怖がらないで、探検しないで、仮定しないこと」だと思います。アメリカに育った移民の子供として、これは難しいのが理解します。私も難しいです。でも、いつも意識を持ってこれをしないようにしたら皆の日常の生活でいい人間関係が増えると思います。皆頑張ったら、一緒に平安で美しい世界を作れると思います。(アメリカ/10代・女性)

●日本人と話すことは確かに難しいです。でも、それは自分に自信がないせいだと思います。オーバーツーリズムのことが気になり、旅行者としてどうしようかと考えていました。共生社会のために必要なのは「時間」だと思います。(アメリカ/20代・男性)

●電車の中には声が出ないことが厳しいと思います。そして道端にはごみ箱がないこともちょっと困ります(笑)(中国/20代・男性)

●日本の文化を大切にしつつ、基本的人権、自由、平和、民主主義という普遍的価値を守り、それぞれの人の個性や意識を尊重することは、みんな一人ひとり取り組むべきことだと思います。(中国/20代・男性)

●敬語は難しいです(とくに電話対応の際)。(中国/30代・女性)

※以下、「国籍・年齢・性別を答えたくない」とした意見

●最近の永住許可の取り消し制度の導入や、帰化審査の厳格化に関する動きが気になります。本来、日本は他の国に比べて留学生の就職率が高く、魅力的な市場でした。しかし、制度が急に厳しくなると、日本以外の国も選択肢に入れられる高度人材ほど、リスクを感じて他の国へ流れてしまいます。少子高齢化が深刻な日本にとって、外国人の労働力は不可欠なはずです。それなのに、就労は広げても、永住権を狭めるような政策は、まるで「労働力としては欲しいが、生活者としては受け入れない」というメッセージに見えます。

●ある有名な回転寿司チェーン店で、持参した飲み物を飲んでいた時のことです。店の料理も注文して食べている最中だったのに、店員が飛んできて「飲み物をしまってください。そうしないと食べさせられません」と強い口調で言われました。私の国では、消費者が店に飲み物を持ち込むことを禁止するのは違法とみなされることが一般的です。そのため、ルール以前に、客に対してこれほど高圧的で失礼な態度を取る店員の振る舞いが理解できません。お金を払って食事をしているのに、まるで悪いことでもしたかのように注意され、非常に屈辱的な気分でした。

●街中にゴミ箱がほとんどなく、コンビニにしか設置されていないのに、そのコンビニで買ったものを店内で食べることは制限されています。さらに、食べ歩きこともマナー違反として周囲から厳しい目で見られます。

●観光地のコンビニでアイスを買った客は、一体どこで食べれば良いのでしょうか？ゴミは捨てられない、その場では食べられない、歩きながらも食べられないという状況は、利用者にとって非常に不親切です。

●段ボールなどの資源ゴミは、自分で細かく縛って特定の場所やコンビニへ持ち込まなければならず、回収頻度も少ないです。特に地方やコンビニが遠い地域では、一度回収を逃すと、次のチャンスまで2ヶ月待たされることもあります。家の中にゴミが山積みになるこの状況は、現代の生活リズムに全く合っていない、合理的だとは思えません。

問われている 日本人の「覚悟」。

弊誌の編集に携わるようになってから、「そもそもHIFってどんな団体なの?」と、度々周囲から質問された。設立から40年以上経ってもこの有様なのだから、余程広報が下手くそだったのだろう。かくいう私も詳細を知るまでは胡散臭さを感じていた。簡単に言えば、「ホームステイしたい外国人学生を、函館周辺的一般家庭に受け入れ、彼らに日本への理解を深めてもらい、同時に日本人にも異文化に触れる機会を作ろう」というのがHIFの基本的な活動らしい。「何かの宗教団体なの?」と訊かれることもあったが、まったくそういう類のものではなく、純粋に国際交流を目的に活動している。しかしこの「純粋に」が、私や私の友人たちのように世俗にまみれた人間には、かえって難しく映る。

「共に生きるということ」を特集しようとしたのは、今「移民問題」が政治的テーマとして注目される中、長年「国際交流事業」に携わってきたHIFが発行元であるCLIPの最終号として、取り上げるのもありだと考えた。「交流」と「共生」はまるで違うものではあるのだが、「交流」の目的である「互いを理解しよう」というのは、「共生」の実現のためにも欠かせないことだ。

そして今回、HIFと何某が繋がりのある方々にご意見をお聞きすると、「共生社会」の必要性と、実現のためにどうすべきかという方向に話が進む。ただ、今号の特集を考えるきっかけとなった「移民問題」というワードを入口に「共生」を考えると、話はややこしくなってくる。

日本政府は長い間、「移民」という言葉を避け、一時的な労働力の受け入れという建前をとってきた。そして、曖昧な制度の中で外国人労働者を増やし続けた結果、様々な歪みも生まれている。そもそも、彼らを「労働力」と見ているも、同時に「生活者」とであるという視点が不足しているように思う。もちろん、彼らにだって独自の文化や習慣、信仰など、それぞれのバックボーンがあり、日本とは大きく異なる場合もある。それを社会がどこまで理解し、許容できるのか。そこが抜け落ちていたのではないだろうか。

私たちの社会は、これまで「移民・多文化共生」に向き合う機会が少なかったし、これに対する抵抗感もある。しかし今、移民社会の入口に立っているというのが現実だ。理解が未成熟なままだと、今後ますます大きな摩擦が生じ、差別や搾取といった問題も起きるだろう。それは欧米の状況を見ても明白だ。

「移民の数と質の制限を!」と叫ぶ政治家がいる。「数。質はとにかく、「質」などと聞く、それは差別的で「まず、おまえの質はどうなんだ」と問いたくなる。彼らは機械ではない。尊厳を持って生きる人間なのだ。それそれに夢を持ち、将来を思い、また権利も主張もする。もちろん、みんなが品行方正なわけではない。中には問題を起こす者だっているだろう。日本の都合ばかり押し付けても、思惑通りにことが進むはずはない。時に衝突し、時に譲歩する。それが「共に生きていく」この現実だ。誰もが納得し、平和に暮らせる「共生社会」なんて絵空事であり、残念ながら容易く実現できるはずはない。「移民問題」とは、日本の社会がこれまでとは大きく変容していくことになるかも知れないほど大きなテーマであり、私たち日本人にその自覚と覚悟があるのかが問われている。

もしも日本人に、変えたくないと思うこの国の「国柄」があるとして、それを守り続けたいと思うなら、移民の受け入れには慎重な議論が必要だ。行き過ぎたナショナリズムは問題だが、それでも「国とは何か?」そして「日本人とは何か?」を冷静に考えるべきだと思う。その結果、「移民」に対して極めて厳しい基準が設けられた時には、たとえその代償が大きかったとしても、自分たちが選択した姿勢をもがきながらも貫けばいい。混濁が深まる世界の中で、そんな国があってもいい。

(本誌編集人・中村)

牧野潤の普段使いの器。

自分らしさを求めて、試行錯誤を重ねる日々。



今 今回お話を聞きするため、牧野潤さんのご自宅1階にある工房に何うと、京都の陶芸店で間もなく開催される個展の準備のためにお忙しい様子だった。

個人客や飲食店からの制作依頼の他、イベントやポップアップショップには毎回おせいの人がやって来る。そして今、彼女の器に注目しているのは函館のファンだけではない。作品を取り扱いたい、展示会を開催したいと国内のさまざまなショップから声がかかり、そのオーダーに応えるため、多忙な毎日を送っている。

牧野さんが陶芸を志したのは20年以上前のこと。函館市山の手の陶芸教室「函館バウハウス工房」を主宰する佐藤留利子氏のもとに通い、陶芸の基礎を学んだ。そして自宅の新築をきっかけに建物の中に自身の工房を作り、本格的に作陶を始めたのは2006年のこと。知識も経験も乏しく、周囲から見れば無謀にも思えるスタートだった。土選びから

始まり、釉薬の調合、焼成など、ほぼ独学。すべてが手探りで何度も失敗を重ねた。それでも、「心からいいと思えるものを自分の手で作りた」という強い気持ちと、家族の理解が力となって続けてきた。

「私の器作りは、街わず、普段使いしてもらえることが基本です」と語る牧野さん。手にした時に伝わる重さや質感には注意を払う。ただ、理想とする形や色にはまだまだ辿り着けていないと言う。

「今も試行錯誤の毎日で、作陶中の気づきや学びもたくさんあります。それは20年前に始めた時と何も変わっていません。でも、それが楽しくて、工房で作業しているとつい時間を忘れてしまいます」。

最近、陶器のリペアにも興味を持ち始めた牧野さん。「金継ぎ」を学ぶため、定期的に東京の教室へと足を運んでいる。

<https://mego-makino.com>





道南イベント情報いろいろ。

避難所運営ゲーム「Doはぐ」で学ぼう

冬の大地震を想定して、さまざまな状況をグループで話し合っ解決する避難所運営ゲーム(HUG)北海道2025(堂時Doはぐ)の研修会「Doはぐで学ぼう」が3月、函館で開かれる。がや病気の人のへ対応、物資の配布や施設の使用など、ゲームを通じて避難所運営の仕方を学ぶ。主催者は北海道防災士会道南ブロックは4月以降も定期開催を計画しており、6月7日(日)にも開く。回団体は3月14日(土)にもイベント「道南の防災を考える」をサン・リフレ館で開催。親子や友人13名~16名に参加。

【日時】3/29日 13:30~16:30
【会場】函館市樺文文化交流センター 体験学習室
函館市白旗町551-1
【対象】小学生以上 【参加料】650円
【申込み・問合せ】
函館市樺文文化交流センター
TEL:0138-25-2030 FAX:0138-25-2033
jomon-center@hicc.jp



【申込み方法】
3/20(金)までに右記の二次元バーコードをQRコードから申込み
【主催・問合せ】
北海道防災士会道南ブロック
dnhbousai@gmail.com

冬だけの特別な体験 本格縄文土器づくり

函館市樺文文化交流センターでは3/19まで期間限定縄文体験学習として「本格縄文土器づくり」を開催中だ。講座ではレンガ窯土を使い、土器の作成から野焼きまでを行う。本格的な土器づくり体験が可能。製作した土器は樺文文化交流センター内で保管し、令和8年度実施予定の「縄文土器づくり」講座の参加者の土器と一緒に野焼きを行い、完成となる。参加日の前日までに電話・FAX・メールのいずれかで申込みを。

【日時】3/19(日) 9:00~16:00
(最終開始時刻13:00)※事前申込制
【会場】函館市樺文文化交流センター 体験学習室
函館市白旗町551-1
【対象】小学生以上 【参加料】650円
【申込み・問合せ】
函館市樺文文化交流センター
TEL:0138-25-2030 FAX:0138-25-2033
jomon-center@hicc.jp

北海道ハウスタウンプラザ
(函館市亀田交流プラザ)小会議室4
函館市栗原1-26-12
【参加費】無料 【定員】先着15人
※定員に達した場合は4月以降に参加を。

人気料理復刻 ワイン番外編3Days

普段はおひるごはんカフェのtaomが不定期で行っている夜の特別営業、3月は、アジア、中東、コーカサス、中南米など、過去のワイン会で好評だった世界の料理を選び、再度登場する。種類豊富なグラスワインと、思い思いの組み合わせを楽しんでみては。なお、taomは今回が移転前最後の特別営業となり、4月から航路(函館市末広町12-8)に移転予定とのこと。詳細は、インスタグラム(@taom_gohan)をチェックしてほしい。

冬だけの特別な体験 本格縄文土器づくり

函館市樺文文化交流センターでは3/19まで期間限定縄文体験学習として「本格縄文土器づくり」を開催中だ。講座ではレンガ窯土を使い、土器の作成から野焼きまでを行う。本格的な土器づくり体験が可能。製作した土器は樺文文化交流センター内で保管し、令和8年度実施予定の「縄文土器づくり」講座の参加者の土器と一緒に野焼きを行い、完成となる。参加日の前日までに電話・FAX・メールのいずれかで申込みを。

【日時】3/19(日) 9:00~16:00
(最終開始時刻13:00)※事前申込制
【会場】函館市樺文文化交流センター 体験学習室
函館市白旗町551-1
【対象】小学生以上 【参加料】650円
【申込み・問合せ】
函館市樺文文化交流センター
TEL:0138-25-2030 FAX:0138-25-2033
jomon-center@hicc.jp

北海道ハウスタウンプラザ
(函館市亀田交流プラザ)小会議室4
函館市栗原1-26-12
【参加費】無料 【定員】先着15人
※定員に達した場合は4月以降に参加を。

女性センター 春のイベント情報 P I C K U P

【いちいさ春の音楽会】
日頃から女性センターで活動する音楽団体が小さな音楽会を開催。ギター、琴、リコーなど、多彩な音色に耳を遊ばせてみては。
【日時】3/28(土)13:30~15:30
【場所】函館市女性センター 3F講習室
函館市東川町11-12
【出演団体】
アンダルシアギターサークル・グラナダギターサークル・安田ギター愛好会・七草会
【琴】Ricotom(リコーダー)

【季節のお料理教室(春)】
季節の食材が持つ栄養価や健康効果に注目し、心身に優しい旬の料理を学ぶ。【日時】4/14(火)10:00~12:00
【講師】木下あやこ(中尾医療指導員・調理師)
【対象者】函館市民または市内在住者
【参加費】1,600円※エプロン・バンダナ・食器用布巾・スリッパ持参
【定員】12名(抽選) 【申込受付】3/17(火)10:00~※抽選日は3/31(火)
【申込み】0138-23-4188

【参加資格】
・植物や公園に関心のある方
・月1~2回の活動に参加できる方
・18歳以上の健康な方
・交通手段について各自用意できる方
【申込み・問合せ】
(一財)函館市住宅都市施設公社 市民の森
0138-59-4472 (平日9:00~17:00)

【参加資格】
・植物や公園に関心のある方
・月1~2回の活動に参加できる方
・18歳以上の健康な方
・交通手段について各自用意できる方
【申込み・問合せ】
(一財)函館市住宅都市施設公社 市民の森
0138-59-4472 (平日9:00~17:00)

函館西高等学校 美術部作品展

函館西高校美術部では「多くの人に作品を見てもらいたい」と函館市地域交流まちづくりセンター1階ギャラリーで、毎年作品展を開催している。今年、美術部生徒19名が1年間の活動の中で、特に思い入れのある油絵などの有無によって投げかける距離や変更される。今大会では、ペア戦とシングル戦を予定。事前申込の上、当日は上靴を忘れず持参すること。
【日時】3/28(土)10:00~15:15
【会場】函館市青年センター 体育館
函館市千代台町27-5
【参加費】無料
【申込み・問合せ】
道南地区バラスポーツ指導者協議会事務局
函館市高島町25-18
中島れんぱいふれあいセンター内
hkdsyospos@gmail.com
FAX:0138-51-0044
※参加申込書に必要事項を記入の上、メール・FAX・郵送のいずれかの方法で送付または直接持参。3/19締切。
【主催】
世界自閉症啓発デー函館地域実行委員会
道南地区バラスポーツ指導者協議会
函館市青年センター

【日時】3/28(土)
【ワークショップ(要予約)】
①11:00~12:30 ②14:30~16:00
※先着順、各6名
【ふらっと翻訳(予約不要)】
①12:30~14:30
※所要時間15~30分程度
【参加費】
・ワークショップ:
1,500円(焼き菓子・飲み物付き)
※親子参加の場合、小学生以下は無料。キッズホットミルク200円が提供可能。
※絵本1ページ分プレゼント
500円+ワンオーダー
【会場】Cuppa Tea? By Hakodate Berries
函館市末広町12-8 航路/kohro 2階
【予約・問い合わせ】
ykjkd3@tbloud.com
@cuppa_teahakodateのDMや店頭でも受付可能。

【日時】3/28(土)
【ワークショップ(要予約)】
①11:00~12:30 ②14:30~16:00
※先着順、各6名
【ふらっと翻訳(予約不要)】
①12:30~14:30
※所要時間15~30分程度
【参加費】
・ワークショップ:
1,500円(焼き菓子・飲み物付き)
※親子参加の場合、小学生以下は無料。キッズホットミルク200円が提供可能。
※絵本1ページ分プレゼント
500円+ワンオーダー
【会場】Cuppa Tea? By Hakodate Berries
函館市末広町12-8 航路/kohro 2階
【予約・問い合わせ】
ykjkd3@tbloud.com
@cuppa_teahakodateのDMや店頭でも受付可能。

五稜郭アーティスト事業 バリアフリーコンサート

函館市芸術ホールにて令和7年度五稜郭アーティスト事業 バリアフリーコンサートが開催される。声が出たり、体が動いてしまっても大丈夫。障がいや年齢に関係なく、誰でも自由に音楽を楽しめるコンサートだ。前半はピアノ、後半はアンサンブルでの演奏が予定されており、クラシックからディズニーの人氣曲まで、幅広いジャンルの楽曲が演奏される。
【日時】3/27(金)
18:00開演(開場17:30)
【会場】
函館市芸術ホール(ハーモニー五稜郭)
函館市五稜郭町37-8
【入場料(全席自由)】
一般、2,000円 学生/1,000円
未就学児 無料
【チケット取り扱い】
函館市芸術ホール
※3/26までに右記の二次元バーコードから申込み。
【主催・問合せ】
バリアフリー実行委員会
0138-69-1858

【日時】3/28(土)10:00~15:15
【会場】函館市青年センター 体育館
函館市千代台町27-5
【参加費】無料
【申込み・問合せ】
道南地区バラスポーツ指導者協議会事務局
函館市高島町25-18
中島れんぱいふれあいセンター内
hkdsyospos@gmail.com
FAX:0138-51-0044
※参加申込書に必要事項を記入の上、メール・FAX・郵送のいずれかの方法で送付または直接持参。3/19締切。
【主催】
世界自閉症啓発デー函館地域実行委員会
道南地区バラスポーツ指導者協議会
函館市青年センター

【日時】3/28(土)10:00~15:15
【会場】函館市青年センター 体育館
函館市千代台町27-5
【参加費】無料
【申込み・問合せ】
道南地区バラスポーツ指導者協議会事務局
函館市高島町25-18
中島れんぱいふれあいセンター内
hkdsyospos@gmail.com
FAX:0138-51-0044
※参加申込書に必要事項を記入の上、メール・FAX・郵送のいずれかの方法で送付または直接持参。3/19締切。
【主催】
世界自閉症啓発デー函館地域実行委員会
道南地区バラスポーツ指導者協議会
函館市青年センター

DOO-WOP Dance Studio 第5回発表会

函館市桧木町のストリートダンススタジオDOO-WOP Dance Studioでは、スタジオ5周年を記念した発表会Doo The Right Thing vol.5を函館市民会館で開催する。テーマを「1826」とし、1日1日大切に取組んできた練習の成果を披露。同スタジオは、子供から大人、未経験者からプロダンサーを目指す人まで幅広く指導中だ。
【日時】3/28(土)
17:00開演(16:00開場)
【会場】函館市民会館 大ホール
函館市湯川町1丁目32-1
【料】2,000円(全席自由)
※電子チケットのみ購入は下記URLから。
https://tekei.jp/8051/62282
【主催・問合せ】

tsu@the table gallery

市内入舟町の倉庫を利用したギャラリー「tsu@the table gallery(ツ・アット・テーブル・ギャラリー)」が2026年の開催予定の展示会

市内入舟町の倉庫を利用したギャラリー「tsu@the table gallery(ツ・アット・テーブル・ギャラリー)」は、4~10月の期間、毎月さまざまなアーティストの展覧会や各種イベントを開催している。2026年の開催予定は下記の通り。詳細はギャラリー公式サイトでご確認ください。

4/3(金)~5/1(土) 「ウチの食卓展」
5/1(土) 「波多伸芳時展」
6/5(金)~6/15(金) 「小池貞子写真展」
7/3(金) 「シグナカモココ展」
8月 未定
9月 未定
10/1(金)~12月 「相済平堂展」

tsu@the table gallery
函館市入舟町1-16
junkim.suzuki@gmail.com
公式サイト https://www.tsu-gallery



DOO-WOP Dance Studio
doowop.dance.studio@gmail.com
https://www.doowop-dance-studio.com/contact

四馬亭一文 落語会 市内4ヶ所で開催

函館を拠点とするアマチュア落語家「四馬亭一文」は、これまで、市内4ヶ所で開催される。落語のヒュージョウンとして活動する四馬亭文は、これまで飲食店などを舞台に定期的に落語会を行っているが、今回は3月の1か月間に4回という集中開催になる。「落語好きも、そうじゃない方も、とにかくお聴きいただきたい一文」。

【日時】3/8(日)17:00~18:30
【会場】まるたまスクエア
函館市元町2-9
【料金】木戸銭1,000円+ピロシキ&ドリンク代
【はこたて芸芸会寄席】
【日時】3/14(土)14:00~13:00開場
【会場】まるたまスクエア
函館市元町2-9
【料金】木戸銭1,500円
【月夜の一】
【日時】3/22(日)18:30~19:30
【会場】cafe & bar 月夜...
函館市湯川町32-12
【料金】木戸銭1,000円+ワンドリンク
【日時】3/29(日)18:00~19:30
【会場】中吉本とこーひの唐キリン
函館市花園町17-26
【料金】木戸銭1,000円+ドリンク代

ごあいさつ

2003年9月、札幌で開催された「NPO全国フォーラム2003北海道会議」。そこで、札幌でボランティア情報誌を発行していたボランティア倶楽部の森田麻子さんと初めに出会った。当時、NPOやボランティア活動を紹介する専門誌はほとんどなく、ボランティア倶楽部は全国的にも注目される存在であった。そんな中、森田さんから「道南でも情報誌を出してみたら」と声をかけていただいた。その一言が、大きな転機となった。函館のNPO団体や函館市とも協力し、2004年3月、情報誌「ポックリ」を創刊。A4サイズ12ページ、5,000部を年4回発行した。取材、編集、印刷、紙折りまで、すべて自分たの手で行った。その後、[@h(アットエイチ)]、そして[CLIP]と形を変えながら発行を続け、今号で第92号となる。デジタル全盛の時代であっても、紙媒体には紙ならではの力がある。手に取り、広げればすぐに読める。電源も通信環境もいらない。読みたいときにすぐ読めるという点で、実はもっともモバイルに適したメディアなのかもしれない。

これまで支えてくださった歴代の編集長の皆さま、手に持って読んでくださった読者の皆さま、寄付や広告でご支援いただいた皆さま、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。 さらば。 CLIP発行人 池田 誠

EDITORS' NOTES

●かつてJTで働いていた時に、旅行のコースは必ず手書きだった。ワープロなものも、流行り始めたが、文字がらがらつながら書いていた。デジタル時代の今は信じがたいことかもしれないが、紙に書かれたもの、人柄を映し出す。(池田)

●最終号というところで、やはりここはこれまでの感謝の気持ちを伝える場にもしたいと思えます。読者の皆様へ、アンケートやインタビューや寄稿にご協力くださった皆様へ、CLIP編集部のメンバーへ。そして、編集部の中村さんへ、あっという間の約3年間、多くの経験と学びをいただきました。ありがとうございました。(徳坂)

●観光地方面では、多くの外国人観光客が訪れ、街ににぎわいをもたらしています。一方で、文化や習慣の違いから、マナーについて考える場面もあります。函館を選んで訪れてくれることへの感謝の気持ちを大切にしながら、市民と来訪者の双方が心地よく過ごせる環境づくりが求められていると感じました。相互理解を深めることが、共生社会への第一歩になるのではないのでしょうか。(澤口)

●職場という場所は、年齢や経歴、国籍を超えた多様な人材が集まる。立場によって見える景色も異なるはずですが、私は同じ職場で働く人々を「仲間」だと思っています。尊敬しています。(共生と関と、この職場で過ごした日々が思い浮かびます。どうかお元気で。読者の皆様も本当にありがとうございました。(松田)

●人って人生で何回泣きつづけるんだろうと考えました。故郷でも、またとなく泣きつづける人、いろんなところで暮らす人、国を超えて外国で暮らす人、わたしは振り返れば6回。これらが増えるかどうか、春を待ちながらゆっくり考えてみようと思います。(近藤)

●CLIPではイベントページを担当しておりました。ご愛読も受けつづけた部分はありますが、何かの制作することはこれまで大変なかっ!と感しながらも、CLIPの制作に携わることができて光栄でした。個人的に毎号楽しんでいたコラムが読者からなくなるのは寂しいですが、一旦お別れ。みなさま本誌にありがとうございました!それぞれの場所で、どうぞご愛ください。(吉田)

●いよいよ最終号となりました。これまで、取材を快くお受けいただき貴重なお話をしてくださった皆さんの方々、こちらの強引なお話を飲み込んでご協力いただいた読者の皆様、また、無理な要求に答えていただいた池田氏とHIFのみなさん。特に僕のペースに翻譯(ほんろう)させてくださった編集担当の松田さん。そして何より、拙い内容の弊誌に長い間お付き合いいただいた読者のみなさん。この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。最近HIFの前に張りつづけているのがだんだん少なくなり、自分の老いを実感させられた日々ですが、CLIPは楽しい仕事でした。まだ気持ちだけは若いので、マイペースで仕事は続けます。またどこかで、みなさんの目に触れることがあるかも知れません。今後どうぞよろしくお願いたします。(中村)

2026年3-4月号(毎月発行)
2026年3月1日発行
HIF HOKAIDO INTERNATIONAL FOUNDATION
040-0054 函館市元町14-1
TEL: 0138-22-0770 FAX: 0138-22-0660
E-mail: event@hif.or.jp
https://www.hif.or.jp